4. アルメイダの憂鬱

１６世紀に国力の頂点を極めたポルトガルが、やがて衰退の道を辿るようになった要因は一つではあるまい。実は終わりの始まりは常に絶頂期だというのが、世界史の常識らしい。ポルトガルの場合もそれに当てはまるようだ。ではその潮目の変わり目は何であったのだろうか。１４世紀末に生まれたエンリケ航海王子が、この国に繁栄をもたらした最大の功労者であることには誰も異論を持たないであろう。それまでヨーロッパの船乗りたちの考えていた世界は、陸はユーラシア大陸であり、海は地中海と北海でしかなかった。それをエンリケ航海王子は一挙に大西洋、インド洋、太平洋と広げて行った。インド航路を開拓したヴァスコ・ダ・ガマが胡椒を満載した船と共にリスボンに帰港したのは１４９９年である。その後のポルトガルが海洋王国として、東洋や新大陸その交易によって得た富は今の我々の想像を絶する。にもかかわらず、当時の王家はそれを地上の国民たちのためではなく、自分たちの権威を誇るためとはいえ天上の神のためにのみ使い果たしてしまい、その後のポルトガルの凋落を許すことになった。

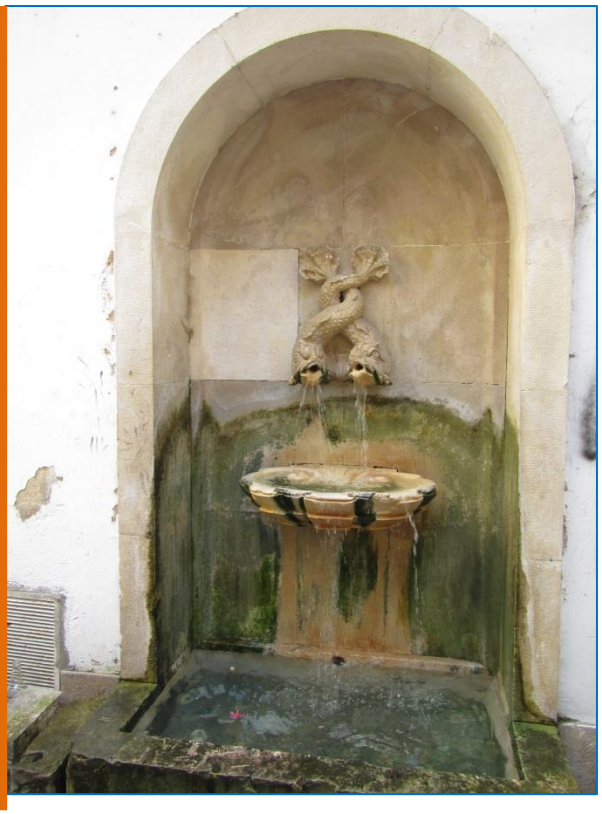
ようやく見つけたアルメイダの生地を表示するプレート。「ＲＵＡ」とは通りとか街路という意味だが、そこにあるのはわたしが両手を広げれば両方の家の壁に届きそうな狭い路地であり、あたりの雰囲気はむしろ路地裏といった風情である。佇むわたしの横を突然、子ども達の歓声が通り過ぎていった。

まだ、屈託のなかった頃のアルメイダもまたこうやって、路地から路地を駆け回っていたのだろう。わたしは時空を超えた幼いアルメイダの後ろ姿を、茫然としながら見送った。

では何故、香辛料も砂糖も染料も金さえもが、何故１６世紀以降のポルトガルの繁栄の礎にならなかったのだろうか。もちろん、１８世紀に産業革命が始まるまで、富国はイコール交易化、交易の名を借りた侵略によるものだった。ポルトガルにとって１５世紀中のライバルだったベネティアでも、１６世紀にライバルとなったオランダでも、それは基本的に同じである。交易とそれを支える商業や金融という三次産業だけでは、資本の社会資本としての蓄積には結びつかないとしても、それはポルトガルの責任ではないだろう。

では何がと考える上で１６世紀に始まったユダヤ人排斥運動は見逃せない。スペイン・ポルトガルからイスラム教徒であるアラブ人が一掃されるまでは、実はイスラム教徒の絶対的な支配下とはいえ、キリスト教徒ともユダヤ教とも共存・共生していた。それがイスラム教勢力を追い出したとたんに、今度は矛先をユダヤ教に向けたのだ。近世初期の繁栄に比して、現在のイベリア半島がヨーロッパの辺境に甘んじている最も大きな要因が、このユダヤ教排斥ではなかったかと、わたしはリスボンの風に吹かれながら感じていた。

そしてこのポルトガルでのユダヤ人排撃は、スペインという隣国の圧力に表面上だけ繕うように始まったとはいえ、やがてやっかみや偏見などが嵩じて激化していったものである。イベリア半島はアラブ人との攻防の歴史にのみ、目が行きやすいが、実はユダヤ人排撃の歴史も、イベリア半島のその後の興廃を考えるとき又見逃してはいけないだろう。もちろん、ポルトガルの空気に潜む悲しみについて考えるためにも。



アルファーマとはアラビア語の「泉」が語源である。その名の通りあちらこちらにこんな水場がある。アマリア・ロドリゲスもアルファーマのどこかの水場で洗濯しながら、船で旅立った恋人を偲ぶ歌を歌っていたそうだ。アルメイダもこのジュジアリア街の水場の水を飲み、遊んで育ったのだろう。

アルメイダの生家のあった、ジュジアリア(Judiaria)通りには、旅の最後の日、ほとんど諦めかけていた時に見つけた。わたしはしばらくその街や通りというよりは、路地か小路ともいうべき狭い石畳の先の、小さな広場、昔の日本なら長屋の奥にある井戸端のような場所の片隅にうずくまっていた。確かに井戸端である。今はもう昔のような使われ方はしていないのだろうけど、この国では泉と呼ばれているタイル張りの水場が井戸端である。子ども達が水遊びをし、女達は洗濯をしながら井戸端会議に花を咲かせ、時には海に出ていった男達を恋しがって歌を歌っていただろう。ファドの女王アマリア・ロドリゲスも、アルファーマに幾つもある同じような水場で洗濯をしながら歌っていたのだそうだ。

ところで「ジュジアリア」というのは集団としての「ユダヤ人」という意味である。ジ

ュジアリア通りとは、ユダヤ人街ということになる。アルメイダの生家がここにあるということは、彼がユダヤ人か、少なくともユダヤ人の血を引いているということだろうか。そうだとすれば、そして１６世紀前半に激しさを増したユダヤ人排撃運動を考えれば、アルメイダが出世や安楽な暮らしを諦めて東洋に向ったことが些かでも理解できる気がする。果たしてアルメイダの船出は前途洋洋、希望に胸を膨らませてのものだったのだろうか。富裕な家庭に育ち何一つ不自由なく育った彼だが、その富裕が故に嫉妬と羨望のこもった憎しみに晒され、生国での前途への希望を絶たれた故の船出を決意したのではなかったか。船出の時、アルファーマの街並みを振り返りながら、彼は諦めと哀しみに胸ふさがれていたのではないか。わたしは水場に佇みながらアルメイダの哀しみを思っていた。

水場からこの階段を上って、狭い路地が続いている。夕暮れの薄闇が迫る中を少し行って、左に登っていくと古い大聖堂に出る。アルファーマはどこもこんなに狭い階段、坂道、路地が続いて迷路のようになっている。大震災の被害を受けなかったため、今日までイスラム時代の雰囲気を残しているのだ。